

第6節 岩宿時代の陥穴状土坑をめぐる二三の問題

1 分布と立地

(1) 分布

地名表(第22表)に掲げた遺跡は30ヵ所⁽¹⁾である。調査者の所見をもとに時代区分をすると、このうち中峯C、木の根、下原上層は縄文草創期ないしそれ以降の所属と考えられる。青葉山E、支倉は後期岩宿時代から草創期の間、また鹿児島県下の諸例は細石刃石器群に伴い、縄文草創期に属する可能性が高いように思われるが、岩宿時代か草創期かの区別には一層の検討を要する。

このように、正確な所属時期の決定という点で、多くの不確定要素を含んでいる。しかし、ここでは、中峯C、木の根、下原上層をのぞいた、28遺跡を念頭において、以下の記載を進めることにしたい。

地理的には北海道、四国をのぞいて、宮城県から鹿児島県まではほぼ日本全土から広域に検出されており、限られた地域の特例的な現象ではないことを予想させる。一方で静岡県以外では分布は局所的で散漫であり、調査事例の多い関東地方で発見例が少ないのは、あるいは実態を反映しているのかもしれない。しかし本来の分布傾向を把握するのにはもう少し資料の蓄積をまたなければならないというのが実情であろう⁽²⁾。現状においても遺跡数では岩宿時代例として扱った諸例のうち、静岡県下の発見例が28例中12例(43%)、土坑数では142例中102例(72%)をしめ、静岡県下の発見例の多さが目立っている。

時間的な位置については、A T下位の例が7、A T上位の例が21遺跡で、A T上位の例の方が多い(長井台地はA T上、下)。A T上位例については、四葉の例が掘り込み面をVI層とする他は、鹿児島県下の薩摩火山灰にからむ検出例をはじめ、武蔵野台地のⅣ、Ⅲ層相当の例が多いといっていよいであろう。これまでの少数例から量的な変化を時間的に辿るのは難しいといわなければならないが、岩宿時代の特定の一時期にかぎって出現するのではなく、いくつかの時期にわたることを予想させる。その一方で後期岩宿時代を前、中、後葉に3分すれば、前葉と後葉に多いとみることができるかもしれない。以上のように遺跡数がさほど多くなく、なおかつ時期を確定できる例がかならずしも多くないという現実の中で、群馬、神奈川、静岡県下の例にA T下位層準の例が顕著に存在することは、ここに一つの盛行期を認めうる可能性があるという点は注意すべきであろう。

上記のように地理的・時間的分布を概観して、地域と時期とを特定しながら検討をすすめることは、まだ時期尚早というべきであろう。現段階ではこれまでの発見例を後期岩宿時代の所産ということで一括してとらえ、地域的・時間的な傾向の窺えるものについては、その都度言及するというにしたい。

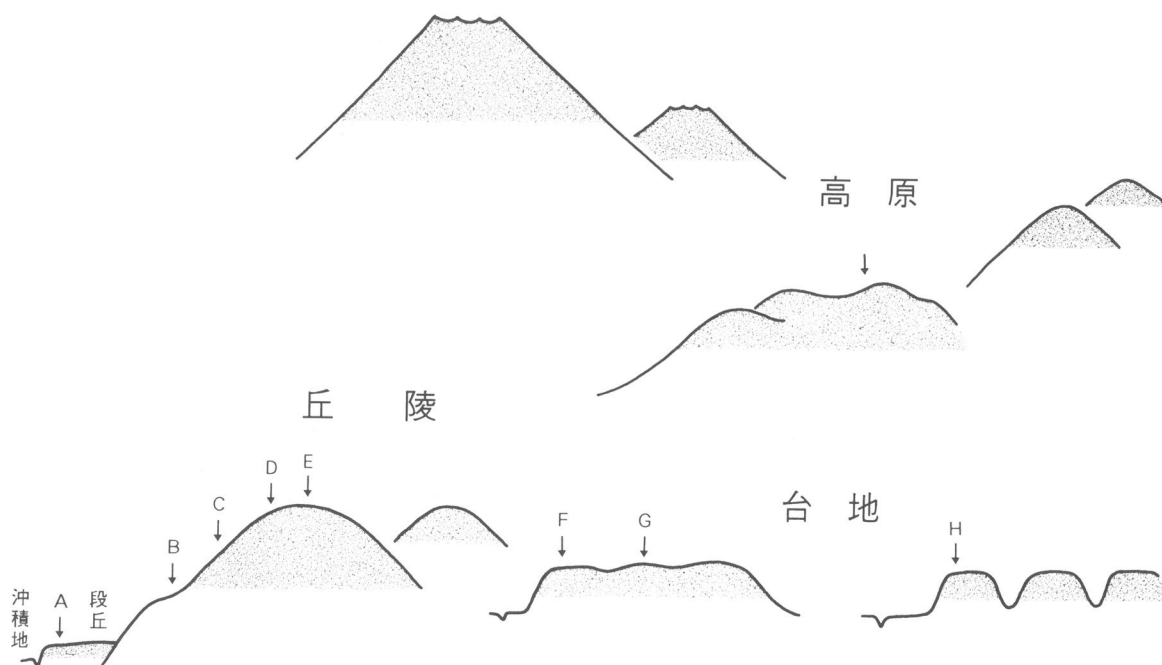
(2) 遺跡立地

立地は大きくみてA)丘陵上、B)台地上の2類型に分けられ、これらが主体をしめる。量的にもいづれかに偏ることはないといっていよいであろう。また鹿児島県大久保遺跡が標高500mの上場高原から、静岡県久根ヶ崎のように標高15mの低位段丘までの地理空間を含み、高原、丘陵、台地、沖積面に接した低平地(段丘)までをおおう。こうした、地理空間の広がりや遺跡立地の地形選択傾向は、岩宿時代の遺跡立地の傾向一般を反映したものであるとみることができよう。ただし、関東地方での発見例の少なさが実態を反映しているとすれば、ひろびろとした平坦面が広大にひろがる関東地方のような地形環境下では、不向きな性格を有していたとみるべき要素かもしれない。

このような一般傾向を認めただけで、丘陵直下で沖積面続きの低いたかまりに位置する静岡県久根ヶ崎、直線的な台地の縁辺に沿うような埼玉県大山、東京都ICU Loc.15、丘陵性台地頂部の小盆地状凹地

中の湿地沿いのわずかな高まりの上に設けられた長崎県牟田の原の例などは、一般的類型からはやや外れる印象がある。沖積地に突き出すような舌状台地上（第134図H）、側面を深い谷に囲まれた細長い馬の背状の丘陵上（同図D、E）、比較的広い平坦な台地上（同図G）での立地というありかたが、一般的で典型的な立地環境のありかたとして意識される。

立地をもう少し微視的にみておこう。発見された遺跡の地理空間や立地の地形類型は、後期岩宿時代の遺跡立地の一般傾向と同様だが、同じ台地のなかでも、土坑の設けられる位置が台地の縁辺あるいは肩部に偏る傾向が強いことは指摘しておく必要がある。ただし台地上にあって、縁辺よりも内奥部側によって位置する例として、東京都四葉、神奈川県長井台地の例がある。また磐田原台地上では、標高差1～2mの浅谷とこれに取り囲まれた微高地がゆるやかな起伏をなして続いているが、こうした台地のうち寄りの微高地上に位置するのが広野北をはじめとする磐田原の例である。ここでは、一部開析谷に面した所をのぞけば、土坑立地地点に対して、縁辺とか肩とかという地形変換点を求めにくいのが実情である。また、初音ヶ原のように台地を横断するような例もあり、安易な単純化、類型化はまだできないように思われる。



第134図 土坑占地類型概念図

（3）数と配列

28遺跡中、検出された土坑が1例だけにとどまるものは、宮城県支倉をはじめ、10遺跡であり、土坑発見遺跡数の少なさにくらべて複数検出例が多いように思われる。発掘面積の大小にもかかわるが、埼玉、東京の5例はいずれも1基の例であることが注意される反面、静岡県下では1遺跡の発見数がとびぬけて多いものが目につく。

1遺跡で複数の土坑が設けられている場合には、その配列性や単位性などを見ておく必要がある。複数の土坑が一定の配列をみせて一つの単位をなしている可能性を指摘できると思われる例に、青葉山、初音ヶ原、下原、八田原、広野北などがある。初音ヶ原、下原、八田原、広野北は弧状にあるいは直線状に土坑がつらなるが、土坑の長軸方向、配列性や土坑間の距離などからみて、これらが複数の小群に

分かれていた可能性も考えられる⁽³⁾。

配列の方向性は、地形の把握の仕方にもよるので単純にはいいにくいところもあるが、台地の走向に直行する方向で設けられている例として、青葉山、初音ヶ原、下原、八田原があり、台地の走向に並行するものに広野北がある。初音ヶ原はS字を描いてつらなり、南端では直行、その他は並行する。これら以外の例は、あるいは集中しあるいは散在しており、二、三基で不規則にならんで一群をなすものもあるいはあるかもしれないが、とくに線状に並んで連続する傾向を必ずしも顕著に見出せないように見受けられる。

多数の土坑が検出された例で調査が広範囲におよぶ例では、当然のことながら一つの遺跡内の占地にも変化がある。初音ヶ原、下原、八田原、広野北、仁田尾などは、あるときには台地あるいは丘陵の縁辺部に、またあるときには中央部に主に設けられるが、同じ平坦面上に連なって設けられるのが基本である。これに対し加茂ノ洞Bはこれらとはかなり異なった発見状況であるので、一言触れておきたい。

三島市内の諸遺跡は箱根火山の山麓にあり、幾筋もの谷に開析された北東から南西方向の細長い丘陵がのびている（第17図）。加茂ノ洞B遺跡もこうした丘陵の一つに位置を占めている（第28図）。同遺跡周辺でも丘陵主体部（主尾根）の基本走向は北東から南西に走っている（コンター150、160mラインの囲む尾根の走向）。これに対し、北西の沢地川方面からは、遺跡ののる丘陵主軸の走向に直交するかたちで、南、東方向に向かって小支谷（コンター120、130mで画される小丘陵の走向）が幾筋も入っている（第28図）。そして発掘区画の中央真西は140mコンターではじまる沢の谷頭に面している。

したがって、遺跡周辺では沢地川方面からはいる支谷によって囲まれた北西―南東方向の小丘陵（支尾根）が放射状に延びる形になっている。

遺跡の範囲は主尾根の西斜面下部と、この斜面から西北方向に派生して支尾根に移行する狭い平坦面の二つの地形面を占めている。結局第134図の模式図のB、Cに相当する地形を占めていることになる。箱根・愛鷹山麓では、通例D、Eをおもに利用しているが、加茂ノ洞の事例を加えると、集落遺跡立地として可能なところはもとより、集落立地不適地とでもいいうるようなところまで土坑設置場所としてひろく利用していることになる。むしろ集落遺跡立地よりももっと多様な地形空間を利用しているというべきであろう。

箱根、愛鷹山麓の岩宿、縄文時代の遺跡は、地図上にこれらの位置を朱書すれば真っ赤に塗りつぶさねばならないほどの密集地帯を形成する。同地域の土坑検出遺跡の分布もこの一角を占めている。すなわちこれらの土坑の設置場所は、岩宿時代人の日常生活空間の中にあり、なおかつ集落からさほど遠からぬ位置にあったと考えるのが自然である。

そしてそうしたなかにあっても、加茂ノ洞の例は、巨視的には集落立地と共通の地形空間の中にありながら、微視的には集落立地とは異なる地形利用のありかたを示しており、陥穴状土坑の用途判定に大きな判断材料を提供することになったというべきであろう。

このように全国分布、標高、地理空間の類型、地形面、地形面上での占地、地形に対する土坑の配列方向、土坑数などの点であらゆるヴァリエティーがあり、非常に多様な現れ方をしており、安易な単純化はできないことがわかる⁽⁴⁾。これだけ臨機応変に適宜土坑の設置場所を選定したことが予想される。そしてそれらの場合は人間側の都合というよりも、自然の側たとえば動物の習性・行動などに起因するものであるように受けとめられる。

註

- 1) 集計は1997年3月現在。この他に宮崎県後牟田、別府原遺跡、鹿児島県立切遺跡などで発見が報じられている。
- 2) 愛知から中四国まで空白となっているが、稲田孝司氏によって岡山県蒜山にはその存在が指摘さ

れている。

稲田孝司 1993 「西日本の縄文時代落とし穴」(『論苑 考古学』天山舎)。

- 3) 土坑の単位制の把握では、安藤広道氏の分析事例も興味深い。類型区分による一般分類ではなく、具体的な大きさ、微細な特徴の対比により、土坑群からセット関係を抽出している。

安藤広道・鹿島保宏 1991 『鴨居原遺跡発掘調査報告』(横浜市埋蔵文化財センター)。

- 4) 高橋信武氏は、全国的な視野で九州の陥穴状土坑を詳しく論じるなかで、岩宿時代の例にも言及し、その配列や地形との関係などに注目する先駆的な発言を行っている。

高橋信武 1994 「九州の陥し穴の変遷」(『先史学・考古学論究』熊本大学)。

2 陥穴状土坑と遺構、遺物分布

陥穴状土坑の機能推定を行う際、石器ブロックなどの生活用具の分布と礫群、配石、炉などの生活施設と土坑とがどのような位置関係にあるのかを当初から問題にしてきた。寺谷、広野北では土坑の発見状況を、生活施設として石器ブロック、礫群、配石などとの共存・共用関係と理解して、貯蔵穴を想定した。その後初音ヶ原の事例を目の当たりにして、陥穴と考える方が合理的であるとの考えにいたった。このことについては第4節1でもふれたところである。

こういう経過があるので、詳細は同節2の事例紹介に譲るとして、現状ではこのあたりの事情がどのようなのか俯瞰しておきたい。

しかしこの作業は、以下の諸点で容易ではない。第1に掘り込み面を正確に決定しうる例がはなはだ少なく、土坑とその他の遺構、遺物分布との層位的、考古学的共伴性を明確に想定しうる例がはなはだ乏しいこと。第2に、発掘面積次第では、調査区の外に共伴関係にある資料群が存在するかもしれないこと。第3にかりに発掘所見レベルで共時と認めても、集落の存在時に集落内施設として、石器群等と共伴関係にあったかどうかはさらに検討を要すること。第4に、土坑内出土遺物についても、それが直接土坑の年代を示すかどうかには問題があること。土坑が後で掘られても、先に掘られていても、同時に存在していても、至近に遺物群が分布しているか、していたかすれば、いずれの場合も土坑内資料として遺物が混入する場面はおこりうる。反対に至近距離に遺物分布がなければ、土坑内資料はいずれの場合にも生じない。

こういう事情を踏まえたうえで、岩宿時代例について土坑と共伴関係にある遺構、遺物を求めえない場合と、可能性としてはありうる場合とに区分するようなかたちで、全体の傾向を見ておきたい。この際を目安として、当時の集落規模を直径30~50m以内と考え、この範囲での一定量のまとまった共伴資料の有無をみておきたい。

- (1) 土坑のみ単純存在とみなされる例。

青葉山、支倉、四葉地区、長井台地、焼場、八田原

- (2) 可能性として共伴関係を否定しえない例。

勝保沢中ノ山、大山、ICU Loc.15、鈴木、下原、加茂ノ洞、子ノ神、柏葉尾、寺谷、広野北、
匂坂中下4、椎ノ木山、垂水第1、仁田尾

- (3) いずれとも判断材料がないものおよび詳細不明例。

菅原神社台地上、初音ヶ原、久根ヶ崎、高見丘、牟田の原、南学原、大久保、鹿村ヶ迫

土坑のみの単純存在とみなされる遺跡6、遺構、遺物との共伴の可能性のある遺跡14である。可能性を含む例の方が断然多い。可能性のある例のなかに厳密な意味で集落内施設としての共用関係を想定しようとするれば、事例的にも方法的にも難しいが、勝保沢中ノ山、大山のようにシンプルな状態でブロックと土坑とが至近距離にある例、ICU Loc.15、寺谷、匂坂中下4のように、土坑内に礫や石器が多く含

まれているような例の詳細な検討以外に、当面方法はないかもしれない。

こうした分布関係上の問題の他に、土坑自体にも大きさの大小、深さの深浅、形態、構造の違いがあって、貯蔵穴か陥穴かの用途を判断するには、まだ慎重であらねばならない要素がある。しかしながら、共伴、共用の検討以前に、陥穴状土坑の用途がいずれであるにせよ、先に見たように集落立地と土坑設置場所とがおなじ生活行動領域内にあれば、頻繁に移動を繰り返す暮らしの中にあつては、時間経過にしたがつて集落内施設や石器ブロックなどが土坑と分布位置を重複させる場面が多々起こりえたというのも、また一つの現実であつたであろう。こうしてみると、遺跡群密集分布地域にあつて、少数とはいえ土坑単純遺跡が少なからず存在し、加茂ノ洞のように少数の石器の発見はあるにしても、むしろ遺跡の場そのものが、集落立地不適地を占めているような事例の存在の意義は大きい。

正しい判断を導くためには、土坑とその他の遺構、遺物が至近の距離にあるような例や土坑内に遺物を残す例の詳しい検討がさらに求められよう。

3 形態と構造

これについては山下秀樹氏の詳しい記載がある（山下 1989）。ここでは土坑が三つの類型に区分されている。すなわち、単純化していえば、円形で深い広野北型、楕円気味で浅い子ノ神型、長方形でやや深い青葉山型の3類型である。現在でもここでの所見を基本的に変更する必要はないように思われる。ただその後、本書を編むきっかけとなった下原遺跡をはじめ、三島市内で同様の土坑の発見が相次ぎ、一部に新しい知見をもたらした。これ以外にも、関東、磐田原台地、九州などで新資料の蓄積があり、多少の補足をしておく必要が生じている。

しかしながら、初音ヶ原や仁田尾のデータの大部分が未公表であること。磐田原台地の土坑にも従来の知見をこえた例が発見されていることなどの現実からすれば、新しい分類とその意味付けなどについて、いまはことを急ぐ時点ではないように思われる。したがってここでは、既報告の事例に対し多少とも新しい要素と思われる知見を補足するとともに、その後の新出資料の目立った特徴を列挙しておく。

（1）新資料の特徴の第1は、三島市内でのAT下位層準における陥穴状土坑の多量の発見である。こ

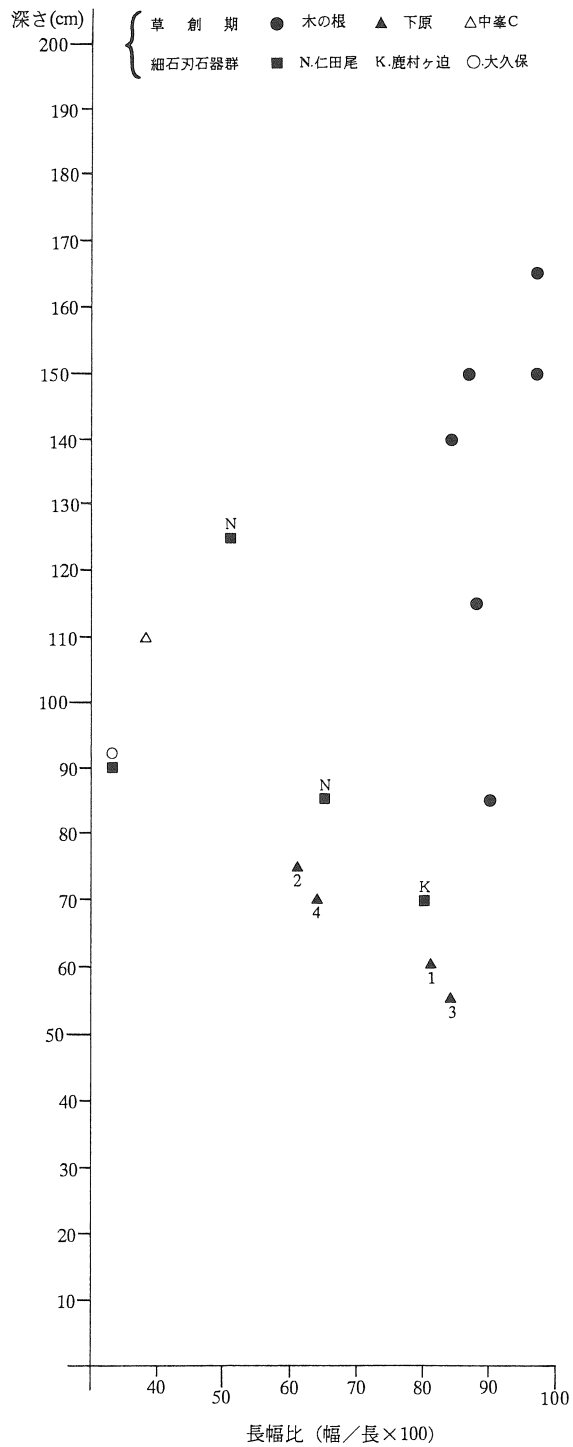
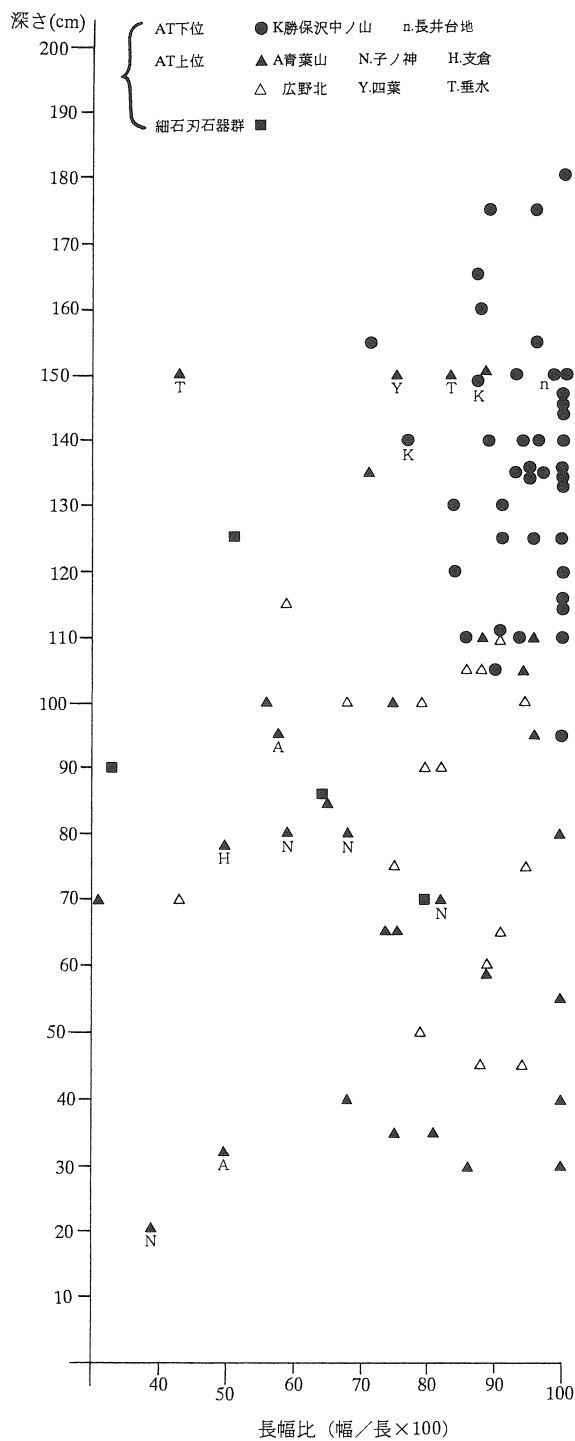
れらは形態法量グラフの右上の分布群すなわち広野北型の分布域の上方により深い一群が顕著にあらわれたことである（第135図）。

（2）グラフ中の左端のグループの存在が明確になりつつある。すなわち既存の中峯C（縄文期：第136図）に菅原神社台地上、大久保、仁田尾が加わって、青葉山より一層細長いグループの存在が明確になりつつあることである（同図）。

（3）下原上層の縄文草創期、鹿児島県下の細石刃石器群にともなう、土坑底に小ピットを有する例が明確になった。鹿児島県下の事例は、平面形が楕円形から長楕円形の青葉山型をこえてさらに細長いものまでを含む。これらには典型的な円形プラン以外のすべての類型が含まれている。

以上のように資料の増加とともに形態上も大きさの点でも変異幅が増大し、三つの類型区分の境界が曖昧になっている。しかしAT上位の愛鷹山麓（子ノ神型）、磐田原台地（広野北型）、東北地方（青葉山型）の一群それぞれに、一定のまとまりがあることも依然として確かなような印象がある。同時に、箱根山麓を中心とするAT下位の一群の顕在化やTピットに近い長幅比を示すものの出現は、第4、第5の類型設定も必要やに思われるところがある。

問題の一因は深さのデータに不完全なものが多く、それゆえにグラフ上に複数の分布群が生ずる可能性がある。またこれとは別に、土坑の類型特性は本来、遺跡あるいは地域単位で抽出すべきところを、全国の資料を一元的にグラフ化することによって、かえって区分を不明瞭にしていはいしないかという危惧もある。



草創期、細石刃石器群の坑底に小ピットをともなう土坑と、A T下位の資料の存在が顕在化してきたことが象徴するように、時期区分の大枠を考慮しつつ、全国的な分類が必要なばかりでなく、地域、遺跡ごとの特性もふまえた把握が、今後求められるように受け止められる。

寺谷、広野北などの例のように、遺跡単位で見ると、1遺跡で複数の類型を含むように見受けられることの意味や類型区分の是非、第4、第5の類型区分の必要性といった問題は、こうした作業によって遠からず解決の方向を見るであろう。

これらのことは、現在の資料の蓄積の段階が収束期をむかえておらず、時間軸と地域枠を加味したうえで類型区分をなしうるまで、新たな分類を控えておくべきことを示唆しているように思われる。現状をこのように認識したうえで、土坑の形態や大きさについて、概観しておきたい。

A) 平面形態

長幅比にしたがって100～81を円形、80～61を楕円形、60から41を長楕円形、40以下を細長形とすると、岩宿時代の例では円形から細長形まですべてを含む。A T下位層準の例では、数値上楕円形域に属する勝保沢中ノ山、下原下層各1例をのぞいて、すべて円形であるという集中傾向が認められるが、A T上位のグループは全平面形類型にわたる。細石刃石器群、草創期では楕円形から細長形までを含んでいる。木の根はすべて円形域に属し、深さを加味してグラフをみると、木の根が右上にその他が左下に分離した分布をしめす。

ほぼ円形の広野北型と長楕円形の青葉山型の分布境界が、関東地方にあるという指摘が山下氏によってなされているが、勝保沢を評価すれば広野北型の分布は北関東までのび、A T上位層準で青葉山型を含む長楕円形域に属するグループは、九州（垂水第1）にまでひろがることになる。しかしまた、こうした分布関係は時期差に起因する可能性もある。

新資料の追加は東北地方ではなく、三島地方のA T下位の資料群、細石刃関係の鹿児島が主なもので、A T上位層準は例数がかならずしも多くないという現実をみれば、両地方の正確な把握なしには多くを語りえないというのが現状であろう。

B) 深さ

グラフ上で最深の例が下原下層第4号の180cmである。ただしこれは掘り込み面が削平されているので、これより深かったことは間違いない。掘り込み面が分かるいくつかの例を記しておく。子ノ神3号が一番浅く80cmであり、ついで久根ヶ崎110cm、加茂の洞4号120cmがこれにつづく。おそらく深さという点では、時期地域を問わず80cm前後を下限にし2mを越すものまであったであろう。箱根山麓のA T下位層準グループに深いものが目立つ。従来の知見では浅いものが多かった磐田原台地でも、勾坂中下4で150cmという例が確認されている。なお、同じ台地の高見丘遺跡では深さ190cmという例が検出されたという（富樫 1997）。

またここでは項目立てをしていないが、土坑中の覆土の埋積状態も重要な検討項目である。ここで取り上げた事例の中には、ICU Loc.15で一時的に埋められた可能性が高いとの指摘がなされているほかは、自然埋積と考えられるものばかりであったことを念のために付け加えておく。

C) 長さ

全時期の例を含めて一番大きい例は勝保沢中ノ山の直径265cm、一番短い例は加茂ノ洞、広野北の75cmである。50cm単位で集計すると、150～101cmが一番多く50%、100cm以下が30%、151cm以上が15%を占める。実態としても80cm～2mほどの範囲にほとんどが収まるであろう。

以上事実記載という意味で、できるかぎり変異の幅について記してきたが、こういう記載は、周辺特徴にとらわれ、本来の中核的特性としてのまとまりを見失うおそれがある。そういう意味で時期的変化と地域差を考慮した、将来の新しい類型把握にむけて、A T下位/A T上位/細石刃石器群・縄文草創

期にわけて現状での見通しを述べておくことにしよう。

(1) A T 下位層準

平面形は円形で、断面は坑底が丸いものもふくめて、筒状ないしバケツ状を呈する例が顕著である。分布は東海、関東地方に限られる。しかし下原、勝保沢中ノ山には平面形が数値上は楕円域に属する例が1例ずつある。またこのグループによく似た例にⅥ層段階の四葉、A T 上位層準想定 of 寺谷の例がある。

(2) A T 上位層準

円形から細長形まで形状の変異が大きい。円形の例は関東から九州（椎の木山）まで、楕円形の例は関東から東海に、長楕円形の例は東北から宮崎（垂水第1）まで分布する。しかし、同じ長楕円形でも青葉山と垂水第1とではそれぞれ全体形の特徴を異にする。細長形の分布は関東～九州までとなる。全体に前段階より形態変化が大きくなり、分布も広がるとみることもできそうだが、量的に十分でなく、明確な特徴を把握できる段階にない。

また、青葉山が草創期に属するものであれば、長楕円形の例は東海以西に限られることになる。このように、問題も多く資料の増加が待たれる。

(3) 細石刃石器群層準

岩宿時代か縄文草創期かは現状では分らない。平面形態は細長形から楕円形までのばらつきがあり、坑底に小ピットを有することを基本とする。

(4) 草創期

中峯C、木の根、下原上層の3遺跡を数えるにすぎない。形態ではそれぞれ細長形、楕円形、円形域の三つに分かれ、円形グループは木の根が一層深い位置にあり、グラフ上では綺麗に分散するが、例数の少なさによるのかもしれない。これらのうち下原例は坑底に小ピットを有している。

以上をまとめてみると、現状で確からしいことは、A T 下位層準の関東、東海地方で円形の深い陥穴状土坑があり、時期が下るにしたがって形態に変化がでて、長楕円形の存在が顕著になり、細石刃石器群、縄文草創期には坑底に小ピットを有するものが出現するということになる。そして土坑の盛衰としては南関東のⅦ層段階と細石刃石器群、縄文草創期に盛行期が予想されそうである。

なお、最後にあらためて記しておきたいのは、資料数の増加にともなって、先の形態の3類型が不明瞭になった印象がある一方で、青葉山、三島地方、子ノ神、広野北と個々に遺跡をみていくと、やはりそれぞれに固有の特徴が意識される。また遺跡ごとに非常に斉一性の高い例がある一方で、一つの遺跡でも明瞭に形態の異なるものを含むものがある。このことは、形、大きさなどをつかまえて基礎的な作業として時空分布を検討する際、とりあえずここでも行ったように日本列島全域を一つの基準でくり分けるという、単純で機械的な類型化作業に気を取られすぎると、資料数の増加にしたがって、各類型ごとの変異幅がひろがり、類型区分値が重複し、本来もっていたそれぞれの固有の特性のまとまりを見失いかねない。ここではなしえなかったが、時間の大枠を区分したうえで全国レベルの比較検討を行い、この際、遺跡、地域ごとに固有な特徴、まとまりにも注目しつつ整理が成される必要があるように意識される。

4 岩宿時代における陥穴状土坑の位置

筆者はかつて、ここで取り扱ったような土坑を貯蔵穴と理解した。筆者が直接に係わった磐田原台地の寺谷、広野北遺跡では、それは石器ブロックや礫群、配石などとあい接して位置し、あたかも集落内施設として構築されたと解しうるような配置関係で発見されたからであった。こうした見方は、石器ブロックや礫群、配石、炉といった遺構（施設）の集合体として、岩宿時代の集落像が視覚的に復元されうると期待していたという背景が一つにあった。また、当時の生業と食料問題を考える際に、植物質食料を考慮しておく必要があると考えたことも要因の一つであった。しかし、初音ヶ原での発見を契機として、こうした考えを根本的に再考する必要に迫られたことは、第4節1でも述べたとおりである。その後、初音ヶ原以外にも、集落遺跡外で石器や礫群などを伴わずに、これらと分離した状態で発見される例が増え、また加茂ノ洞B遺跡のように、集落適地とはいえないような場所に、多くの土坑が発見されるというような重要な発見があいつぎ、土坑が陥穴である可能をまず第一に考慮しつつ、資料の実態把握が求められる事態となった。

ところで、土坑を残した岩宿時代人が、本格的な狩人であったことはおそらく間違いないであろう。ただ問題なのは、私たちには、彼らがどんな狩人であったかがはっきりしないことである。彼らはどんな道具を用いて、どんな方法でなにを狩ったのか。採集はなにをどれほどしたのか。生業活動における狩猟と採集はどのような補完関係にあったのか。こんな素朴な疑問が次々と沸いてくるのである。

こうした問いかけから、ヒトは何時から狩人であったのか、我々が思い描く狩人らしい狩人は何時から登場したのか、本格的な狩猟が成立するまでに、時代とともに狩りはどのような変質を遂げてきたのか、こんな関心へとひろがっていく。こうして岩宿時代、縄文時代の狩人像の彼方に、人類史の長い道程が意識されることとなる。

スペインのアンプロナやトラルバのゾウ狩りのように、原人段階から大型動物を狩る勇猛な本格的狩人が登場するという見方が一般的である一方で、狩猟具という考古学的証拠は意外にはっきりしない。特に石器は、一般に前期はもちろん中期旧石器時代まで、槍先形尖頭器は一部の例外を除けば、ほとんど未発達であるとされる。これは日本においても同様であって、本格的な槍先形尖頭器の出現が後期岩宿時代の中頃とされることは、あらためて述べるまでもないであろう。このように石の狩猟具という観点からは、後期段階こそ本格的な狩人の登場という理解も成り立ちうるであろう。結局幻に終わったが、昨年から今年にかけての、野尻湖の“東アジア最古の石槍発見”の報道は、そうしたことの現実と重要性とをよく反映した象徴的な出来事であった。

さて、ヒトは類人猿段階からヒト化の過程で菜食から肉食（雑食）への依存度を高め、狩猟を日常化し狩猟採集民となったといわれる。原人段階では大型哺乳動物の狩猟が本格化し、そしてそのことがヒトの地球全域への拡散を可能にし、その際の狩りの道具が木製の槍であったとされる（渡辺 1985）。ただ近年ドイツのシェーニンゲンで、ウマの化石とともに発見されたトウヒ製の槍は、加工はきわめて精巧なものであり、重心は現代の投げ槍と同じように、先端から1/3の位置に来るように作られていると言うから（鈴木 1997b）、石製の穂先の有無にかかわらず、中大型動物に対する投げ槍が、すでに一部の原人のあいだでは発達していた可能性が高くなった。日本列島に最初にヒトが住みはじめたのもこの頃のことであった。先のゾウ狩りに象徴されるような大型動物の狩人になった原人は、旧人段階に至って狩猟活動と動物への依存度を一層高め、狩猟対象をまわりに棲息するほとんどの動物に広げていく。そして新人段階では集団ごとにトナカイ、ウマ、マンモスといった特定の動物の集中的な狩猟者へと変貌をとげ（小野 1988）、文字通りのビッグゲームハンターになっていくというのが常識的な理解であろう。

ヒト化への契機が、森からサヴァンナへの進出、植物食から肉食・雑食化などにあるとして、猿人化

石の発見が本格化した1960年代以降、狩猟の果たした役割の大きさに特に注目する狩猟説が時代の潮流を形成するようになる。日本でも1960年代になると、今西錦司を中心とした霊長類研究グループの研究が世界的な注目を浴びはじめたことで、それ以来、ヒト化＝ハンティング、猿人＝ハンターのイメージがひろがっていった。ヒトはヒト化の初期段階から、勇壮なあるいは生き活きとして野山を駆けめぐるハンターであったかのようなイメージが、ともすれば先行しがちであった。一方でまた、70年代の中頃にはヒト化の過程でのサヴァンナへの進出において、食料となる地下茎や穴居動物の利用が大きな意味をもっていたこと、これらの採集捕獲の道具として鋭利な先端をもつ掘り棒製作に、チョッパーの存在は有効に作用したのではなかったかという指摘もなされる（西田 1974）。そして70年代の後半における分配説の登場とともに、80年代では、小さな剥片を携えて腐肉をあさる、スカベンジャーといわれるような、いささかみすばらしい狩人の姿が描かれ、初期狩猟採集民像はこのような二つの狩人像のはざままで、大きな振幅をみせるという展開をたどり、今日にいたっているようである（鈴木 1991）。

こうした問題にまつわる議論は筆者にはトレース不能なほどの膨大な蓄積があるし、先の渡辺氏の著書に詳しい。またこの間の議論の発生と展開については、安斎氏による適切な解説を参考にすることもできる（安斎 1990～93）。

このようなヒトのもっとも初期の狩人の姿から、新人段階あるいは岩宿、縄文時代の狩猟への変遷をどのように捉えるべきかという問題は、われわれにとっても大きな関心事である。

後期岩宿時代の狩猟の実態はほとんどわかっていないが、それでもそれに先立つ前期岩宿時代に比較し、それは一層発達したものであり、少なくともこの段階では本格的な狩猟者が誕生していたことを暗黙裡に了解している。先にも記したような大型哺乳動物の狩猟が本格化したとされる、原人段階の狩りの実態とはどんなものであったのか。彼らが保有した狩猟道具の装備がどのように用いられそれを可能にしたのか。クラクトンで古くから知られている木製槍によるという見解がもっとも有力であろうが、これが一般的なものであったとしても、原人がはたして本当に大型哺乳動物の日常的な狩猟者だったのか。そして新人段階の狩猟を本格的で熟達したハンターだとすると、それ以前の狩猟活動はどの程度の達成度にあったのか。後期段階とそれ以前の質的な違いはなんであったか。

このような関心を背景にして、日本列島の問題に立ち返り、陥穴状土坑検出遺跡の資料整理のこの場にあたって、意識されることがらの二三について触れていきたい。

上高森遺跡の年代測定値は60万年前に遡るとされ、岩宿時代の初源年代も一挙に古くなった。そして後期以前の前期旧石器として一括された時代は、前、中期に分ける三期区分案が一層盛んになっているかのようである。しかし筆者の素朴な目からは、後期とそれ以前の前期との差が、前期と中期のそれより大きいように意識される。三期区分案における前期と中期との関係は、斧形石器、ヘラ状石器などの両面加工石器、小型尖頭状削器などを特徴とする削器や小型の尖頭器の連続性の方が際立っていると理解されるので、二分法による素朴な対比をしながらながめておきたい（鈴木 1997 a）。

前期岩宿時代の石器群の特徴の第1は、刺突用の狩猟具（槍の穂先）の欠落あるいは未発達ではないだろうか。後期段階の台形様石器、ナイフ形石器、槍先形尖頭器を刺突用の狩猟具と想定すれば、前期段階においては器種分類表（岡村他 1986）のうち、まずその第1候補にあげられるのが尖頭器であり、この他に発達する削器のうち小形尖頭スクレイパー、小形円形スクレイパー、ナイフ状石器なども可能性を含むかもしれない。しかしこれらは小さく、平面形は尖頭状を呈し二次加工も面的にひろがるが、幅広でずんぐりしており、鋭利な尖頭部をそなえるものは稀である。また横断面は大きさに比して厚く、縁辺はシャープさにかけるきらいがある。縦断面は同様にずんぐりしており、基部（着柄部）の一定の薄さの確保、基部の明確な作りだしあるいは長さの確保という点において欠けるところが著しく、馬場壇20層上面のように尖頭器や小形尖頭スクレイパーの存在が目立つ例はあるにしても、積極的に槍先と

認定できる例ははなはだ少ないように思われる。

第2は石器（ツール）の定型性の低いことであろう。前期段階には前期なりの意図され、組織化された道具の構成原理とそのための素材確保の過程と二次加工技術が厳然として存在するのであって、そのありかたが後期段階と異なることによって不定型の印象を受け、したがってその不定型性も相対的であるにすぎないというのが正しい見方であろう。しかし後期段階では作用部、使用時の支持部、装着（柄）部というかたちで、刃部と着柄部に対する意識と位置関係が明確化され、石器の形態に反映しているのに対し、前期では完成した石器も、その素材も、二次加工技術も、素材の供給技術も規格性が相対的に低い。こうした現象は前期段階の一貫した特徴であろう。

後期段階の狩猟具を含む石器の定型化の背後には、着柄道具の発達があり、柄にはめ込み、しばり、接着するという石器製作と道具の仕上げ過程の精巧化があり（鈴木 1994）、着柄狩猟具の完成、発達と専用化と特殊化が窺える。このような技術的な達成をとおして、槍先形尖頭器の完成があるのではないだろうか。石器器種の定型化の背後には狩猟具の改良・完成、狩猟の効率化などを読み取ることができるであろう。

木器や骨角製の狩猟具、単なる先の尖った石片を槍先に用いることもありえたであろう。縄文時代の鏃一つをとってみても、骨鏃、牙鏃があり、木、竹製の鏃もありうるので、こういうものへの配慮も必要だが、少なくとも槍先、鏃といえば執拗に石を素材として作り続けているというのが、日本のみならず世界の趨勢であろうから、青銅や鉄の出現以前は、石器の中に本格的な狩猟具が存在しているかいないかを見届けることは、狩猟具わけでも刺突、投射用の槍の発達を考えるときには、一つの大切な観点ではあるまいか。今日の我々が想起するような熟達した狩人が携える、効率的で精巧な槍先形尖頭器が登場するのが後期岩宿時代からとみるのも、このような意味でそれなりの重要性のあるところであろう。

本格的で安定した槍先形尖頭器の明確な出現が、後期段階の到来を待たねばならないという点に関しては、日本もユーラシアも事情を同じくするようにうつる。もっともユーラシアにおいては中期段階にはルヴァロアポイント、ムスティエポイントがあり、一部に後期段階の例に近い槍先形尖頭器を含んでいるようであるから（F. ボルド他 1971）、日本の斜軸尖頭器を含めた再検討が必要であるかもしれないが、ユーラシアの前、中期旧石器段階に明らかな槍の穂先としての石器が欠如していることが世界の趨勢であるとすれば、日本の前期岩宿時代の時代特性としても見逃せない点であり、また狩猟の方法や技術段階を考える際に非常に重要な要素であろう。

ヒトはヒト化の出発点以来、新人段階にいたるまで一貫して肉食（狩り）への依存度を高めながら進化の道程を歩んできた。しかし高緯度地帯の植物的自然が極端に乏しい地方での特例をのぞけば、ヒトはカラハリ砂漠の現代の狩猟採集民でさえ食料の大半を植物食（採集）がしめている（田中 1971）。列島内の狩猟採集段階では、狩猟と漁業の発達した縄文時代でさえ、植物食を基本にしている（鈴木公 1984）。

縄文時代の植物質食料の利用は、土器、打製石斧、石皿、磨石・敲石の使用、複雑なアク抜き技術の応用により、植物食の高度で広汎な利用と良質で安定的な確保の水準を示し、季節に応じた生業の配分と食料の貯蔵により、安定した社会を維持した。これから問題にしようとする岩宿時代は、このような縄文的な高度な水準と比較すれば、植物食の利用という面では、より前段階的で初歩的水準であったとしなければならないであろう。石皿を欠き、敲石・磨石の存在は顕著ではなく、したがって複雑なアク抜き技術の開発があつてはじめて達成された縄文時代的な高度な植物食利用のレベルは、想定しえないとすべきであろうから、トチはもちろんのこと、アク抜きを必要とするその他の堅果類や根茎類の利用もきわめて限定的であったであろう。この反面アク抜きを必要としないその他の食品、マツの実、クリ、クルミ、ハシバミ、ヤマノイモ、ノイチゴなどの漿果、スモモなどの種実類の利用は盛んであったであ

ろう。しかしながら縄文時代との対比という観点からは、相対的に動物食とりわけ哺乳動物への依存度は高かったとみなければならない。アク抜き技術の有無の問題のほかに、生業と季節と食料の保存という問題を考えれば、漁業と保存の明確な証拠のない岩宿時代では、一年中安定し得られる食料は動物の他になかったからである（鈴木 1996）。

先に猿人段階以降一貫して肉食の傾斜を深めてきて記したが、この過程は熱帯、温帯、（亜）寒帯における人々のあいだでは、その道筋も依存の割合もそれぞれ異なっていたにちがいない。一気に肉食に突き進む（亜）寒帯、穏やかに漸増しつつ肉食を最低限にとどめうる熱帯、森でないカラハリ砂漠でも植物食主体の食性が維持できるのは熱帯なればこそであった。これとは別に温帯の森では、新石器時代あるいは日本の縄文時代の直前まで動物食への依存度を漸増させつづけ、かなりの程度肉食への依存度を高めていったであろう。おそらく後期岩宿時代は、列島史のなかでももっとも高水準に動物食への依存比率がたかかったのではないか。そして新石器時代の農耕と縄文時代の多角的で高度な植物食利用の世界を構築し、かたや穀類/根茎類、かたや堅果類などのでんぷん質の植物食主体という新たな食性への道筋を辿ってきたのではないだろうか。こうした植物質食料の利用の高度化とともに狩猟技術も一層向上し、漁業の発達とあいまって、あらたな生業体系を完成させることによって、岩宿時代に対して格段に生産性の高い社会へ移行していったのであろう。

縄文時代と対比して、相対的に動物食（主として哺乳類）のウエイトが高かったとおもわれる岩宿時代とは、どのような狩猟体系を有していたのであろうか。動物は年間をとおして捕獲が可能であるにしても、食料確保の容易さ安定性といった側面からみれば、植物質食料の利用が縄文時代に較べて相当低いレベルにあれば、岩宿時代人は狩猟方法の工夫によってその容易さと安定性を確保する必要があったであろう。こうした脈絡のなかにおいて、陥穴状土坑を含む罌を捉える視点が成立しうるのではないかと思う。

日本の伝統的な罌にはククリ（括り）、ハサミ（挟）、オトシ（落とし）、オシ（押し）、オリ（檻、囲い）などがあるが（保仙 1972）、これらを「待ちの狩り」（間接法）とすれば、その対極に「攻めの狩り」（対面法）として鉄砲や弓矢、槍を用いるものがある⁽¹⁾。縄文時代の陥穴のような罌の発達を想起すれば、おそらく岩宿時代では攻めの狩りの他に待ちの狩りとして、その他の罌もかなり重要なものであった可能性がある。そして先にみたように、前期段階以前での槍先としての石器の存在の不明確さから推して、この傾向は時代を遡るにつれて高かった可能性さえあるのではなかろうか。

シェーニンゲンがそうであるように、投げ槍罌はパークランドのようなオープンなフィールドにおいて成立したものであって、氷期でさえ大半が森に覆われていた日本などでは、また別の事情があった可能性も意識の隅に置いておかなければならないだろうが、かりに日本の後期段階以前の狩猟具の主役も木製の槍であったとすると、攻めの狩りでは前、中期段階と後期の差は、単に槍先に石器がつけられたかどうかの違いに過ぎないという可能性もある。後期段階では陥穴状土坑が象徴するように、狩猟法のなかの待ちの狩りとして罌が多様化、発達し、そうした動向の中に陥穴状土坑も出現するというかたちで、縄文的な狩猟体系の前史として狩猟技術の発達を評価できるのかも知れない。そしてさらに、待ちの罌のうちククリ罌やハネ罌のような単純な構造で、設置にさほど手間のかからぬ小型の動物を対象としたようなものは、その発生が前期段階にまで遡る可能性すら考えうるであろう。むしろ、木製の槍が存在していたとしても、前期段階としてはククリ罌のような簡単な罌が、攻めの狩りよりも重要であったと考えるべきかもしれない。

陥穴状土坑がこれからどのくらい古く遡るかはわからないが、現状のようにⅦ層段階が上限だとすると、いろいろな意味で興味深い。第3節で笹原芳郎氏も記述しているように、Ⅶ層が後期岩宿段階の大きな画期に相当しているからである（須藤 1980、佐藤 1992）。それまで主体を占めた台形石器と刃部磨

製石斧を特徴とする石器群は、ナイフ形石器主体の石器群へ移行するが、この石器群の変化は単に石器器種の変化であるにとどまらず、陥穴状土坑を含む罾猟をも加えた狩猟技術の体系とその社会の変革を象徴しているとみるべきかもしれない。

それでは、陥穴状土坑が捕獲を対象としたものは何だったのだろうか、各地の罾猟を見るかぎり先の罾の4類型と捕獲対象動物とはかならずしも限定関係になく、抽象的な方法類型レベルではどの動物もどの方法でも取ることができるというよさそうである。しかし、一般的にいて、動物の大きさに比例して装置は大がかりになる傾向は指摘できるであろう。こういう観点からは、ウサギやタヌキ程度の小型動物はククリやハサミが効率的であろうし、大きな労力を費やして土坑を穿つのは、棲息数も多いシカやイノシシ程度の中型動物を想定するのが無理がないのではなかろうか。そして投げ槍は、ナウマンゾウやオオツノジカ、ヘラジカ等の大型動物とシカ等の中型動物を想定するのが自然ではあるまいか。

こうして登場した陥穴は他の各種の罾猟とともに併用されたが、簡単に沢山設置できるククリ罾とちがって、陥穴は構築に多大な労力を要し、多量に設置できない分だけ、特定の動物の限定的な捕獲が必ずしも意図されたのではなかったにしても、その労力の大きさに比例した中型動物程度の捕獲に対する期待感が込められていたとみることは許されるのではあるまいか。そして狩りの主体部分を構成する能動的な投げ槍猟に対しても、ククリ罾に対しても、補完的な役割を担ったのではあるまいか。

そしてここで、資料的にもっともまとまったAT下位層準の例を念頭に、もう少し考えてみたい。植物相からみると、最終（ヴュルム）氷期には、約5万年前と約2万年前をピークとする二回の寒冷期（亜氷期）があり、この間は温暖、寒冷両要素が混在していたとされる（辻 1987）。後半の寒冷期は33,000年前に始まるとされる（安田 1985）が、Ⅶ層層準の27,000年前という年代は、2万年前に訪れる最寒冷期（ヴュルム氷期最寒冷期）への移行期として捉えることも可能であろうから（野尻湖発掘調査団 1997）、この最寒冷期と比較して温暖な時期であったということになる。

ところで、後氷期の縄文時代を代表する動物相のうち、イノシシは約1万年前頃から急増するという。そしてそれは更新世末期に西南日本の暖地に細々と生息していたものが、分布を回復したことによるとされる（河村 1985）。いまかりに2万年前の最寒冷期以前の、Ⅶ層相当期というより温かい時期が、二回の寒冷期の間の亜間氷期の延長期という意味で、動物相にとって後氷期的な生息条件を提供していたとすると、Ⅶ層段階ではまだイノシシの生息が可能な環境下にあったと考えることができ、縄文のイノシシは2万年前の最寒冷期に一旦姿を消していたものが、ふたたび登場したということになる。後期更新世の動物相の研究からも、最終間氷期以降、後氷期まで、イノシシは生息しつづけていたとあるから（亀井他 1983）、こうした考えも許されるであろう。

さて、先の高橋氏の論文中（高橋 1994）に引かれた陥穴の日本の民俗例をみても、陥穴の捕獲対象はほとんどイノシシであり、筆者の知るかぎりでも陥穴によるシカの捕獲例を知らない。また岡村道雄氏によれば、縄文時代の動物骨に鏃の刺さった例ではイノシシは少ないという。氏も述べているように、イノシシが矢強いことはよく知られているところであり、シカが鏃で捕獲されることが多かったのに対し、イノシシの多くは罾によったのではないかとしている（岡村 1985）。イノシシは気づかれずに視認できる距離に接近することは難しいし、鉄砲の威力をもってすれば話は別だが、森がちの生息空間の中を、低い姿勢で疾駆するところに槍を射かけるのもなかなか難しい。このように、Ⅶ層相当期の陥穴の捕獲対象の一つとして、イノシシを想定することに筆者はひかれる。

またこの時期は、ちょうど野尻湖でナウマンゾウの出土が途絶えた直後の時期とも重なるが（野尻湖発掘調査団 1997）、オオツノジカなどの更新世末期の動物群は健在であり、植物相で言及した最寒冷期以前の温暖要素を評価すれば、更新世末期の動物群に、シカ、イノシシ、キツネ、タヌキなどの後氷期を代表する動物群も加わり、2万年前頃の最寒冷期よりもそして縄文時代よりも、豊富な動物相の時代

であった可能性がある。こうした豊かな動物相を背景として、イノシシも含む多様な哺乳動物が、陥穴の捕獲対象となったのではあるまいか。ただし、多数の陥穴状土坑が線状に連なって発見される例は、土坑間に何らかの遮蔽物を設置しうる可能性があり、また別の考え方も必要であろう。

いずれにしろ、槍を用いる能動的な攻めの狩りと各種の罠を用いこれを補完する待ちの狩りとが併用され、広汎で安定的な捕獲が意図されたであろう。陥穴状土坑は、27,000年前以降、盛衰はあったにしろ縄文時代まで継続して用いられた可能性が高いが、その用途、捕獲対象などを考えるとき、温暖期を挟んだ最終氷期の二度の寒冷期とその後の後氷期への推移のなかで、動物相も繰り返しの出現と大きな変化があり、これを捕獲する側の道具立てにも生業体系にも大きな変化があった訳であるから、陥穴の捕獲対象をめぐる論議にはまだ検討すべき多くの課題が残されているというべきであろう。

こうして、岩宿時代人は移動生活を繰り返しつつも、キャンプからさほど遠くない行動域内のそここに各種の罠を設置し、移動的な暮らしと罠の見回りとが両立するようなかたちで、攻めの狩りと待ちの狩りとを組み合わせつつ、狩猟の安定化と効率化を図ったのではあるまいか。

後期岩宿時代にはいり、とくにナイフ形石器の普遍化するⅦ層段階以降、攻めの狩りとして穂先にナイフ形石器を装着した槍を用いた投げ槍罠が発達し、大、中型動物を対象とした狩りを行い、これとあわせてノウサギなどの小動物を対象にククリ罠などが常用されさらに、イノシシ、シカなどの中型動物に加え小型動物も意識しつつ、陥穴も設置されたであろう。

前期岩宿段階では、木製槍による攻めの狩りに加え、ククリ罠などによる小動物の捕獲は、後の時期よりも一層重要な位置を占めていた可能性を考慮しておこう。そして後期段階を経て、縄文時代には定住集落を基点にして、投げ槍罠に代わって登場したイヌを伴うシカ、イノシシ罠に加え、陥穴の発達が象徴するように各種の罠罠が一層盛んに用いられ、狩猟技術体系はあらたな発達を遂げた。これと同時に、植物質食料の利用は広汎で高度なものとなり、漁業の発達とあいまって、岩宿時代と比較すれば格段に安定的で生産性を高めた、縄文型狩猟採集社会の経済基盤を形成する、という経過を辿ったのではあるまいか。

以上のように陥穴状土坑の存在意義を、岩宿時代における罠罠の重要性を評価する文脈の中で考えてきたが、ここでその役割の度合いをはかる意味で、縄文時代例との数量的比較を若干しておこう。

縄文時代の陥穴といえば、多摩丘陵のニュータウン地域内の例が、調査がもっとも行き届いているとあってよいであろう。ここはおよそ東西14×南北2～4 kmの地域にまたがり、悉皆調査が近年ほぼ終了しようとしている。この長い調査の結果、少なくとも355遺跡から8,000基以上の陥穴が発見されているという（小栗 1993）。このうち50基以上を検出した遺跡が27ヶ所図示されており、100基以上の検出例も珍しくないようである。また遺跡面積を別にすれば、No.740遺跡で493基もの発見があり、100基以上の検出例を有する遺跡はごく普通のことであり、港北ニュータウン内においても同様のことがいえるという⁽³⁾。

岩宿時代の例では、実情のよく分からない初音ヶ原をのぞけば、加茂ノ洞、広野北の17基、仁田尾の16基が最多例であり、縄文時代のような密集状態とは比較にならない散漫な分布を示している。この比較一つをとってみても、岩宿時代と縄文時代との数量差が想像出来ると同時に、縄文時代の土坑の設置頻度の多さを窺い知ることができる⁽⁴⁾。

縄文時代の陥穴という罠罠におけるその発達ぶりは、そのまま待ちの狩りの発達、イヌと弓矢による攻めの狩りを含めた狩猟体系、そして植物質食料の高度な利用、これに加えて漁業の発達など、どの局面においても質・量ともに縄文時代の優位性を示していよう。定住集落を基点に展開された縄文時代の生業は、一層高度で体系的であり、その対象範囲は広く安定的でありえたであろう。岩宿時代の罠罠の位置はこれとの対比的な理解のなかにおいて評価しておくのが妥当のように思われる。（鈴木）

註

(1) 狩猟法はさまざまに分類される。

今村啓爾 1987 「狩人の系譜」(『古代の日本10 山人の生業』、中央公論社)。

田口洋美 1991 「野生動物の動向と狩猟の意味について」(『小山町の歴史』、第5号、静岡県小山町)。

ヴェンデル・H.オズワルト/加藤晋平・禿仁志訳 1983 (『食料獲得の技術誌』、法政大学出版局)。

(2) 土俗考古学的な視点から、縄文時代の畏猟と小動物の重要性が、安斎正人・佐藤宏之氏らによって、さかんに論じられている。

佐藤宏之 1988 「陥し穴猟と縄文時代の狩猟社会」(『考古学と民族誌 渡辺仁先生古稀記念論文集』、六興出版)。

佐藤宏之 1990 「縄文時代狩猟の民族考古学—陥穴猟から—」(『現代思想』第18巻第12号、青土社)。

安斎正人・佐藤宏之 1993 「マタギの土俗考古学—岩手県沢内村での畏猟の調査—」(『古代文化』第45巻第11号、古代学協会)ほか多数。

(3) 竹尾進氏のご教示による。

(4) 愛鷹山麓の遺跡分布図(第39図：発掘遺跡に限定)はこのような観点から参考になる。箱根山麓のⅦ層段階例(第17図)では、発掘例にほとんどの遺跡で陥穴状土坑が発見されている。この時期が他の時期に比べ格段に普及度が高かったのか、あるいはほぼ同一の地形空間と高度を縫うように設計された路線内での現象という意味で陥穴の設置空間などを反映したものなのか、いろいろの可能性が考えられるが、同段階での遺跡分布が少なく、面的にも確認できないことがおしまれる。

〈参考文献〉

安斎正人 1990～93 「アジアの旧石器時代(1)～(6)」(『旧石器考古学』41～46、旧石器文化談話会)。

岡村道雄 1985 「機能論」(『岩波講座日本の考古学1 研究の方法』、岩波書店)。

岡村道雄・柳沢和明 1986 「『前期旧石器』の器種分類」(『馬場壇A遺跡』Ⅰ、東北歴史資料館、石器文化談話会)。

小野 昭 1988 「文化の広がり地域」(『日本人類文化の起源』、六興出版)。

亀井節夫・広田清治 1983 「最終氷期の動物相—陸上哺乳動物を中心に—」(『月刊地球』43号)。

河村善也 1985 「最終氷期以降の日本の哺乳動物相の変遷」(『月刊地球』第7巻第6号)。

小栗一夫 1993 「炉穴と領域」(『法政考古学』第20集)。

佐藤宏之 1992 『日本旧石器文化の構造と進化』(柏書房)。

鈴木公男 1984 「日本の新石器時代」(『講座日本歴史1 原始・古代1』東京大学出版会)。

鈴木忠司 1991 「石器の起源」(『季刊考古学』第35号、雄山閣)。

鈴木忠司 1994 「岩宿文化論」(『論争と考古学』、名著出版)。

鈴木忠司 1996 「採集経済と自然資源」(『考古学による日本歴史16 自然環境と文化』、雄山閣)。

鈴木忠司 1997 a 「岩宿時代の日本列島—「ヒトの来た道」展によせて—」(『展覧会図録『ヒトの来た道—人類500万年と列島最古の居住者—』、京都文化博物館)。

鈴木忠司 1997 b 「〈学会ニュース〉40万年前の木製槍の発見」(『古代文化』第49巻第9号、古代学協会)。

須藤隆司 1986 「群馬県蕨塚遺跡の石器文化—ナイフ形石器の型式学的研究—」(『明治大学考古学博物館館報』No.2)。

- 高橋信武 1994 「九州の陥し穴の変遷」(『先史学・考古学論究』、熊本大学)。
- 田中二郎 1971 『ブッシュマン』(思索社)。
- 辻誠一郎 1987 「最終間氷期以降の植生史と変化様式—将来予測に向けて—」(『百年・千年・万年後の日本の自然と人類』、古今書院)。
- 富樫隆志 1997 「〈図版解説〉静岡県磐田郡豊田町高見丘Ⅲ、Ⅳ遺跡の旧石器時代土坑」(『古代文化』第49巻第4号、古代学協会)。
- 西田利貞 1974 「道具の起源」(『月刊言語』第3巻第12号、大修館書店)。
- 野尻湖発掘調査団編著 1997 『最終氷期の人類と自然』(共立出版)。
- 保仙純剛 1972 『日本の民俗29 奈良』(第一法規出版)。
- F.ボルド/芹沢長介・林 謙作訳 1971 『旧石器時代』(平凡社)。
- 山下秀樹 1989 「先土器時代の土坑」(『考古学の世界』、新人物往来社)。
- 渡辺 仁 1985 『ヒトはなぜ立ち上がったのか』(東京大学出版会)。